RG救対ニュースNo.1

党建設の新たな段階を準備せよ

獄中からの報告　榎原 均

1976・12・3

発刊にあたって

10・13以降　政治警察が用意周到の攻撃をしかけてきたのに対してわれわれの側は、不利な条件の中で、10・13以降の斗いを組織しなければならなかった。

「RG救対ニュース」創刊号は、そうした二とから、反撃宣言として発行される。

「ニュース」の編集の対象は、10・13以降の攻防の当事者であり、「ニュース」発行は、政治警察の攻撃に対する調査活動の組織化、思想斗争の組織化と結びついて行なわなければならない。

政治警察の攻撃の実態の暴露を一つの軸としながら、獄中での斗いを含めた10・13以降の斗いの報告として、月二回の発行予定である。

党建設の新たな段階を進捗せよ！

共産主義者同盟（RG）

第一章　政治警察の攻撃

政治警察は、十月十三日深夜、拳銃、防弾チョッキナナス棒などで完全武装し、ドアを破壊する等をもって、わが同盟を急襲し、数名の同志を逮捕し、第一次のもので数十ヶ所を家宅捜索し、多数の文書等を強奪していった。

政治警察の攻撃は、現在もなお、令状なしのものを含んだ形で続いており、爆取九条を利用してなお数名の同志を逮捕し、数波にわたる無差別の家宅捜索（新聞発表によると、百数十ヶ所におよぶといわれている）と「事情聴取」という名の取り調べ、四六時中の監視体制（点バリを中心としたもの）等が続いている。

警視庁は、同志「大賀達雄」について、十四日午前四時まで令状なし、被疑事実の告知なしで逮捕し、大賀＝竹内をこじつけるために、ただちに京都府警に移送したものの、京都府警は、大賀＝竹内の「面割り」に苦労しなければならなかったという有様であり、そもそもの被疑事実はといえば、第二次RGのあるメンバーの「自供」に基づくものでしかないのである。

同志坂井の爆取一条（共謀）に至っては、同志坂井の完黙の斗いの前に、二十三日間で釈放せざるをえなかったという代物である。（その後、同志坂井は毒物

劇物取締法違反で再逮捕される。）

更に 第一次の無差別ガサ入れのうち千数ケ所は「壬生塚博」の爆取容疑であった（そのうち、竹内毅の犯人隠避で逮捕された同志境の所へは同志壬生塚の容疑で 同志大賀達雄の所へは同志境の容疑でガサに入り、同志大賀を逮捕するという念の入れよう（？）である）が、その容疑の内容たるや、「七五年の爆弾事件の犯人を知りながら告知しなかった」というしろものであって、敵は、同志壬生塚を十月十七日に逮捕し、その逮捕を十日間公表せず、同志に対して「死ぬか、自供するか」などと言ってみたものの、爆取八条では十日間で釈放せざるをえなかったのである。（同志壬生塚は、その後、爆取九条で再逮捕される。）

警視庁とブルジョア新聞（特に朝日）は、七五年の爆弾事件も関係ありとし、「即位五十年にむけて爆弾斗争を計画か」だの何だのとわめきたてたが、こうしたデッチ上げは、獄中同志の原則的な斗いの前に、さしあたりついえ去ったのである。（われわれはなお、デッチ上げに対して十分警戒して進まなければならない。）

同志定田の爆取九条の容疑をみるならば、敵のねらいは一層はっきりするだろう。つまり「秘密活動の実態及び警察の動向」についての報告書を作成し送付したということなのである。これは明らかに別件逮捕であり、今回の政治警察の攻撃が同盟の秘密活動に対する挑戦であることを明らかにしている。

われわれは いずれ 政治警察の攻撃の実態について、しかるべき方法で暴露していくだろう。敵が夢見ているように、「終りよければすべてよし」とは 決してならないことを、ここで言っておこう。

われわれは、反撃を宣言する。

第二章　政治警察の挑戦と非合法党

政治警察の攻撃の本質は、爆取を口実としたところの、非合法党の組織破壊であり、革命的マルクス・レーニン主義の復権を真向から掲げ非合法軍事組織として党を建設することに対する挑戦であり、労働者階級が独自の政党に自らを組織して革命戦争を斗うことに対する挑戦である。

そして、政治警察のなりふりかまわぬ攻撃は、ブルジョアジーに対する労働者階級の憤激が昂まっており、日本階級斗争が必ず革命戦争として発展せざるをえないことに対するブルジョアジーの恐怖をあらわしたものであって、革命的マルクス・レーニン主義を堅持し、革命戦争を戦術として堅持する党組織の破壊と同時に、侵略反革命戦争の路線を更に一歩進め、その路線に反対する一切の勢力を粉砕することを目的にしたものである。

生産手段を独占している資本家階級に労働者階級が経済的に隷属させられている結果、労働者階級に諸々の社会的災禍がふりかかっているのであり、ブルジョアジーはプロレタリアートを隷属させておくために、階級支配の道具としてのブルジョア国家権力を利用しているのである。

プロレタリアートは 自らの経済的解放のためにブルジョア国家権力を粉砕し、プロレタリアート独裁権力を樹立しなければならず、それには、自らを独自の政党に組織し革命戦争を斗うことが不可欠なのである。階級敵が必死になればなる程、それは、革命戦争としての日本階級斗争の発展が不可避であり、革命戦争を組織する非合法党があらゆる困難を排して建設されなければならないことを宣伝しているのである。

そのような党は中央集権主義の思想を実現しなければならない。政治警察の攻撃は、党組織における「指

導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化」と革命運動における「秘密の機能の集中と運動のその他の機能の専門化」を実現することがいかなる意義をもっているかを実地教育してくれているのである。

「指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化」は、党内公開性の問題、情報の組織化の問題と結びついており、レーニンのいわゆる「全ロ政治新聞の計画」と不可分である。

われわれは、党組織の基礎として中央集権主義の思想を堅持し、今日までの「党建設の第二段階」の正しい成果をしっかりとふまえて前進しなければならない。

われわれは、今回の事態を利用して強化される可能性のある非合法党建設破産論・否定論（何の根拠もないもの）に対して断固として反撃し、革命的マルクス・レーニン主義の国際非合法党建設の路線を堅持し、非合法軍事組織を堅持し、革命戦争の戦術（攻撃戦戦術）を堅持する。

われわれが今后、たとえば中国共産党の長征や、ロシア社会民主党の第一回大会における全員検挙以降の再建過程に似た苦いを経なければならないにしても、われわれが、革命的マルクス・レーニン主義の復権を掲げ、PB＝YB、RG＝政治軍隊を中枢とし軍事組織として党組織を建設するとして、「党建設の第二段階」の苦いを進めてきたことは正しく、われわれの路線は断固正しい。

われわれの回答は、より強固な非合法党建設による反撃であり、秘密活動の一層の習熟をもって、党とプロレタリアートとのより強固な結合をつくりだしていくことである。

第三章　国際非合法党建設の新しい局面について

ロッキード事件にみられるブルジョアジーの内部抗争と日本共産党宮本一派の社会帝国主義への純化は、プロレタリアートが革命的マルクス・レーニン主義に接近する条件を広範につくりだしている。

現在の階級闘争総体の一つの過渡的な時期において、われわれが総路線を堅持し、プロレタリアートとの一層強固な結びつきをつくりだして進む限り、政治警察がわれわれに対して勝利をおさめることは不可能である。

「スターリン主義打倒、反スタマルクス主義止揚、革命的マルクス・レーニン主義の復権」を掲げて斗ってきたことが、われわれをして、今日の国際共産主義運動における一定の位置を占めさせているのであり、われわれが、革命的マルクス・レーニン主義を掲げ続ける限り、われわれは、われわれの長所を発展させることによって、今回の攻撃を許したわれわれの欠陥、弱点を克服して前進することができるのである。当面の困難に比して、われわれの前途は洋々としている。

われわれは、「党建設の第二段階」を終了させて新たな段階へと進む途上で今回の攻撃を受け、一定の不利な条件の下で新たな段階を切り拓いていくことを余儀なくされたわけだが、政治警察の攻撃が党建設の第二段階におけるわれわれの欠陥をついてきたものである以上、われわれはこの攻撃のただ中でしか新たな段階の第一歩を踏み出すことはできないし、また、そうしてこそ、党を鍛え上げ、より強固でより内容のある段階に進むことができるのである。

今回、われわれの訓練不足と秘密活動の技術上の未熟さから、数人の同志を奪われ、党の機密を奪われたこと、そして、いくつかの非合法組織が攻撃を受けたばかりでなく、事態に対して用意のできていなかった

人々に対しても攻撃を許してしまったということは疑いない。

われわれは、われわれの組織路線をおし進めていく上でいくつかの欠陥をもっていたということであって機関紙の定期的刊行を軸とした文書による党活動に移行し切れていなかったことに基づいて、情報の組織化の立ち遅れをもたらし、今回の政治警察の攻撃を許したのである。

レーニンのいわゆる「全ロ政治新聞の計画」と結びついた文書を軸にした党活動への移行は、従来の旧ブンド以来の、会議を軸にした党活動とその規律からの脱皮なしにはありえず、われわれはなおゆっくりと進まなければならないが、それは、レーニン『何をなすべきか』に徹底して依拠したところの非合法党建設でなければならず、党綱領によって打ち固められなければならないものであって、単一の党綱領をつくり上げていく作業と一体のものでなければ成功しない。

中央集権主義の組織政策と正しい関連におかれた文書による交通が、綱領問題を解決する正しい方策である。ブンド系諸派においては最近「綱領草案」が流行しているが、非合法党建設の「全ロ政治新聞の計画」の裏づけのない綱領草案は、合法党を美化する役割しかもたないだろう。

われわれをはじめとする革命戦争派は、ロシア社会民主党再建過程におけるレーニン・ボリシェビキの活動から学び、レーニン『何をなすべきか』に更に徹底して依拠して単一党建設を進めるべきである。

レーニン組織論では軍を組織できないというドグマは誤っている。レーニンは、党の型を、あらゆる事態に用意のある組織としているのであって、この「あらゆる事態」には、戦争も含まれるのである。次に、そのような党組織の活動の基本的内容は、レーニンにあっては「全人民的政治的煽動」へこの「全人民的」ということは、今日、批判的に受けとめるべきであるが、

におかれなければならず、こうした点から、全ロ政治新聞が党再建と党の型との内容規定をもって位置づけられているのである。

われわれは、レーニン組織論のこのような内容から学び、党建設の第二段階の正しい成果を引き継いで、党建設の新たな段階を十分な準備を積み重ねて切り拓く。

政治警察との斗争は、まだまだ正念場をむかえていくだろう。そして、われわれは、従来のそれとは違った意味で未知の領域に踏み出すだろう。

中央集権主義の思想に一層徹底し、われわれの全力量を傾けて党を強化し、獄中同志と固く団結して党建設の新たな段階を準備しよう！

(補) 〈爆取に対する斗争について〉

われわれは、(1)爆弾斗争を支持するばかりでなく、(2)日本における革命戦争が爆弾の使用から爆弾のみならず銃火器の使用にむかわなければならないことを認める。(3)問題は、こうした革命戦争の発展を基礎づける階級対立の非和解性の深化をどう非合法党建設に結びつけるか、という点にあり、革命戦争の綱領的内容にある。

暴力革命、世界単一のプロレタリアート独裁、共産主義革命ということであり、銃取、爆取の存在が、プロレタリアート・勤労大衆から武器を奪い、武器使用の正しい知識を奪い、そのことによって武力の行使に対する誤った実践を生み出す原因となっていることをわれわれは暴露し、武器と武器の使用とに対する正しい実践を確立することによって爆取の存在を無用のものにすることとして、われわれの爆取に対する斗争は設定されなければならず、それは、非合法党建設の更なる発展に結びつけて、プロレタリアートの経済的解放を

大目的にした革命戦争＝階級戦争にプロレタリアートを動員していくことでなければならない。

一九七六年十一月二十六日

年末一時金カンパの要請

10・13に始まる政治警察のわれわれ共産主義者同盟（RG）に対する検挙攻撃によって、同盟は一定の打撃を受けました。非合法の党活動とプロレタリアートとを結合させるという点において、われわれが未だ手工業性を克服し切れないでいたという弱点の克服のための作業に取り組んでいる最中に受けた今回の政治警察の攻撃に対しても、われわれの基本路線はゆるがせられることなく、われわれは新たな条件の下での党活動（に入）っています。

今日の情勢の中で、政治警察が革命戦争派の非合法組織の破壊に必死になるのは、そこにこそプロレタリアートの未来があるからに他なりません。われわれは、今回の攻撃のただ中で、党建設の新たな段階を切り拓いていく決意です。

一時（金）カンパを訴えます。

カンパの送り先は

第一勧業銀行 虎ノ門支店 口座番号 C46-1261620 堀江 幹男

獄中からの報告

政治警察の攻撃に対し党建設の前進で応えよう

榎原均

〈はじめに〉

私は去る11月4日、「大賀達雄ニセ榎原均ニセ倉田ニセ竹内毅」（註）として爆発物取締罰則三条違反に問われ起訴され、現在京都拘置所に勾留されています。起訴されるまでは接見禁止であり、そして10月14日の私達六名の逮捕以降も逮捕者が出ている状態のなかで私はまだ今回の一連の政治警察の攻撃の性格やきたマスコミの論評等々について十分把握出来ていませんなさしあたって皆さん方へ第一報を届け、私の義務をはたしたいと考えます。まだ後から逮捕された同志は取調べ中であり、従って私の報告も一定の配慮が必要であることについての御理解を得たうえで述べてゆきます。

（註）なお私への連絡は、当分の間、京都拘置所内大賀達雄として下さい。

今回は警察官及び検察官による取調べのもようについて報告します。私たちは、第一次RGや第二次RGの斗争によって逮捕された同志たちが自供に追い込まれたという苦い経験を持っています。だから私にとっては、取調べの時間は権力による取調べではなく、私による権力の「取調べ」であると位置づけて取調べに対応しました。もちろん私は調書作成の際には黙秘し雑談には一切応ぜず、もっぱら相手がしゃべるのを聞

いているだけでしたから私の「取調べ」は十分であったとは考えていません。だが、いくつかの教訓をくみとることができました。

〈調べは斗争である〉

取調べは斗争である、ということは当り前の事ですが、しかしそれだけに一度この事を確認しておくことが重要です。というのは私たち被疑者の側は捕われており、ここからもう斗争は終ってしまったのだ、という考え方が生れるからです。政治警察もこのことをよく知っており「君たちは敗北したのだ。ここで総括し、誤りを自己批判せよ」といった話をふきかけてきます。だが実はここからすでに政治警察との新たな斗争が始まっているのです。政治警察にとっては、捕えた者を屈服させ、自供させ、情報を引き出し、再びプロレタリアートの斗争に参加させないことを目的とした斗争であり、私たちにとっては決して屈服せず、自供せず、プロレタリアートと党の利益を守りぬくことを目的とした斗争です。

政治警察は捕えた者を屈服させるために、あらゆる努力をかさねます。おだてたり、こき下ろしたり、おどしたり、なだめたり、すかしたり、それはもう大変なものです。だが、この種の手段は、取調べの場が斗争であることをしっかりとおさえておけば、たいした問題ではありません。問題は、政治警察が私たちに対して、斗争の敗北を具体的に論証し、斗争の展望が存在しないことを論証しようとしてきた場合にあると思います。この時、私たちがプロレタリアートの階級的立場にしっかりと立っていないと、思わぬところから足をすくわれてしまいます。つまり、調べの場が単に斗争であることをおさえるだけではなく、その場が他ならぬブルジョアジーとプロレタリアートとの階級斗争の場であることをふまえておく必要があるのです。プロレタリアートの先進的部分にとって敗北は許されるけれども屈服は許されないということを階級斗争の

歴史的経験が教えています。過去において多くの革命家達は敗北し、捕われても決して屈服はせず、屈服することよりはむしろ死を選びました。現在の私たちの獄中斗争においては屈服か死かといった問題が提起されているわけではありません。それだけに屈服することよりも死を選んだ革命家達の不屈のプロレタリア的党系性を獄中斗争において守り抜くことは、私たちにとって最高の義務だと考えます。

取調べの場でプロレタリアートの階級斗争を継続することは本来理論以前の問題だと思います。ところが調べの場での階級斗争は固ら固定したものではなく、流動的なものであり、理論斗争や思想斗争が含まれています。そして私たちの側には、権力によって捕われ、党組織や友人達と切り離されているという不利な条件もあります。とはいえ、斗争意欲に満ちてさえあればプロレタリアートの立場に立ってこの階級斗争を斗うことは困難なことではないと思います。しかし、私たちの運動がいつも調子よく展開されているわけではないし、敗北や失敗に対して打ちひしがれてしまったり、政治警察に対して恐怖感をいだいてしまい、斗うを失ってしまうといったことは大いにあり得ることです。こうした状態では、プロレタリアートの立場に立つということが、日々の取調べでその内実を問われることになります。つまり政治警察が仕かけてくるブルジョアイデオロギーによる思想斗争に対して共産主義的意識でもってそれを解体し、そうすることによってこの階級斗争で次第に優位を占めてゆくことが問われるわけです。

〈敵を知る〉

とはいっても私たちは取調べの場で相手と論争したりするわけにはゆきません。ただでさえ相手のおしゃべりを聞き、相手の真意をさぐり、階級的警戒心を昂めるわけです。これが私たちの斗争方針ですが、こうした方針を貫徹するためには政治警察が何故、何の

ために私たちを捕え、取調べを行うのかということをはっきりとさせておかねばならないと思います。政治警察の主張は、私たちが爆発物取締罰則に違反し、「連続交番爆破闘争を行なった」ことに対して私たちを逮捕し、「社会の支持を失なっている」私たちに対して、「闘争の方法をあらため、人間の道にそむかない生き方」をするよう説得する、というものです。そして、「もし君が爆弾闘争を正当だと考えているなら、その理由をここで述べてみろ」とせまってくるのです。つまり調べの場は「君がこれまで活動してきたことに対して反省する場だ」というわけです。

このように政治警察は必ずしも赤裸々に屈服をせまってくるのではなく、「自発的な投降」をせまってきます。というのは強权は勾留という形ですでに発動されており、この強权の発動が調べの前提にあって屈服への強制力として作用しているからです。だから調べの場でおだやかに話しかけられたとしても屈服させるための強制力が解除されているわけではないことは言うまでもありません。そのことは「早く供述すれば早く釈放する」「確信犯は出すわけにはゆかない」といった彼らのつぶやきが示しています。

ところで身柄の勾留という強权の発動を前提にしているとはいえ、政治警察による「投降のすすめ」が一定の有効性を持つとすれば、それは私たちの側で政治警察に対する正しい認識を欠いていることによるものだと思います。いいかえれば、政治警察に対する闘争についての正しい実践を十分わがものとしていないことです。よく調べの場で「君達は权力闘争をめざして交番爆破闘争をやったようだが、はたして有効だったのだろうか」とか「交番爆破位で警察はびくともしない。逆に君達の組織は分裂し、解体していったのではないのか」といったことを相手は主張してきますが、政治警察との闘争について観念的な考えオに陥いってあれば、かんじんの闘争の場でスキを突かれることに

もなりかねません。一時「自衛隊解体」というスローガンが流行しましたがあのスローガンと同じような意味で警察権力の解体を考え、それとの関連で政治警察との闘争を位置づけていれば、政治警察の思想闘争に対して十分耐えられないと思われます。こうした思想は、国家権力の解体によって、プロレタリアート、被抑圧大衆の革命的エネルギーを引き出すという内容に要約されますが、この内容は、ブルジョア国家権力の役割を正しく把握しておらず、その結果、政治警察との闘争についての正しい方針を導き出せないのです。だからこうした見地から、政治警察との闘争を位置づけていると、かんじんの取調べの場で闘争出来ず、屈服させられる恐れがあります。

国家権力を解体することによって、プロレタリアート、被抑圧大衆の革命的エネルギーを封じ込んでいるという認識があります。たしかにブルジョア国家権力は、ブルジョアジーの階級支配の道具として、プロレタリアート、被抑圧大衆の革命運動に対する抑圧装置として機能しています。だから国家権力が革命的エネルギーを封じ込んでいるという見解は一見正しいかの如く思われます。しかし、よく考えてみれば、ブルジョアジーは、かつては国家権力を握っていなかった時代にもプロレタリアートに対する階級支配を維持していたのであり、国家権力を握ってからは政治的にも支配階級となってその階級支配を強化してきたことがあります。つまりブルジョア階級のプロレタリア階級に対する階級支配は、国家権力によってなされているだけではなく、資本制的生産様式そのものによってもなされているわけです。マルクスはオーインターナショナル一般規約前文で「労働用具すなわち生活源泉の

※（上段に挿入）引き出すという考え方の裏には、
国家权力がプロレタリアート、被抑圧大衆の
革命的エネルギーを

独占者への働く人の経済的隷従が、あらゆる形の隷属、あらゆる社会的悲惨、精神的退化、政治的従属の根底にあることと述べていますが、ここに資本制的生産様式そのものがブルジョアジーに与える階級支配の内容と、ブルジョアジーの政治的支配との関連について明瞭に述べられています。マルクスはこの見地に立って、プロレタリアートの独裁について、「土地の貴族と資本の貴族は、つねにその政治的特権を、彼らの経済的独占を擁護し永続させ労働を隷属させるために利用しているので、政治権力の獲得はプロレタリアートの偉大な義務となっている」と述べていますが、これらの見解こそがオニインターの日和見主義的指導者達や、レーニン死後のオニインターの指導者達によって投げすてられてしまったものであり、私たちが革命的マルクス、レーニン主義の復権の叫びとしてきたことは周知の通りです。

さてこの革命的マルクス、レーニン主義の見地からすれば、国家権力の解体によってプロレタリアート、被抑圧大衆の革命的エネルギーを引き出すという考え方は誤まったものであることがわかります。なぜならプロレタリアートの革命的エネルギーを封じ込めているのはまさに、資本制的生産様式そのものであり、国家権力は、この資本制的生産様式を基礎にして生みだされた種々の矛盾に対する抑圧装置としての役割りをはたしているわけですから。だがこう述べただけでは明らかに一面的です。というのは、プロレタリアートの革命的エネルギーを生みだすのも資本制的生産様式とブルジョアジーの政治的支配に他ならないからです。この一見矛盾している二つの観点は、大衆の自然発生性と共産主義者の意識性について論じたレーニンの『何をなすべきか』の内容によって、統一的に把握することが可能になります。レーニンは労働者の自然発生的な運動それ自体で共産主義的意識に到達しないことを指摘し、共産主義者の意識性を強調しました。

レーニンは共産主義的党に指導されない限り、プロレタリアートの革命闘争は共産主義革命を実現することは出来ないことを見ぬき、全ての精力を革命党の建設にささげたわけです。だから、レーニンにとっての政治警察との闘争とは、ロシアの政治警察の解体をめざしたものではなくて、革命党の建設と、革命党とプロレタリアートの結びつきを作り上げる闘いに対する政治警察の攻撃との闘争でした。レーニン型の党と全国的政治新聞の計画は政治警察との闘争にとっても最大の武器となったのです。

もし私たちが政治警察の言うようは「爆破闘争を権力闘争」と考えていたりすれば、私たちはプロレタリアートの立場から階級闘争を闘うのではなく、国家権力に対する共産主義的立場から政治警察と闘うのではなく、国家権力に対する急進民主主義的立場から政治警察と闘争することになってしまいます。もちろん、こうした見地に立っている人々でも政治警察に対して完黙で闘うことができるし、実際にそのような人が多勢いることについて私は否定しようとは思いません。だが私はこうした見地に立っている人々の政治警察との闘争は来して党建設に結びつかず、従って精力の浪費をもたらすという考えをなくすことはできません。とりわけ私たちに対する今回の政治警察の攻撃は、爆取違反に名を借りた革命党の非合法活動に対する挑戦であり、私たちの党建設の前進こそが政治警察の攻撃に対する唯一の解答であるということを私たちは肝に命じておかなければならないと思います。

こうして調べには完黙し、雑談にも応じないという私たちの方針は、これが革命党建設の利益に一番かなっているということから導かれたものに他なりません。囲われた場では政治警察に一切の情報を与えないということを実践するためには私たちが、共産主義的意識の助けを必要とするゆえんです。

＜政治警察による思想攻撃の事例＞

政治警察が、身柄の勾留という強権を発動しておさながらも調べの場では「自発的投降」をめざしているため、その思想攻撃は階級協調のイデオロギーを基本としています。「警察官も給料をもらって生活しているという点では労働者と同じだ。われわれは社会から孤立している君達に対して人間として社会生活が営めるよう説得することを職務としている」「君たちは労働して妻子を養はったことはないだろう。他人の労働に寄生して生活しているから甘えが生じ、独りよがりになり、社会から孤立してゆくのだ」といった調子で、社会の名の下に警察官はその階級的役割をぼかそうとし、他方生産的労働者に従事していないということでもって革命家の事業に価値を認めないと主張してきます。だが、こうした主張は労働者を愚弄するものです。この社会がブルジョアジーとプロレタリアートという二大階級に分裂していることをおおいかくし、ただ収入額の同一性をもってこのブルジョアジーの暴力の担い手達は自分からも「労働者」なのだというわけです。

プロレタリアートという階級は、自分の労働力を資本に売り渡し、資本を増殖する限りで生きることを許される人々の集団を意味していることは周知の通りです。彼らの収入が労働力の価値によって決定されていることも明白なことです。ところで資本制的生産様式が発展すると、社会のプロレタリアート以外の諸階級、諸階層の収入も、プロレタリアートの賃金を決定する法則に支配されるようになります。（もちろんこのことは、高級官吏や、事業主の職制が、一般労働者よりも高額な収入を得ることを排除するものではない）ここに下級官吏の間にプロレタリア的な意識が生れる根拠があるわけですが、しかしながら下級官吏の経済的地位は、プロレタリアートとは全く異なっています。下級官吏は国家の定めた職務に従事することとひきかえに、給与を受け取るのであって、彼らの労働力は商

品として売買されているわけではないし、そしてまた、彼らの労働は、資本を増殖しているわけでもないのです。だから下級官吏の意識はその従事する職務によって大きく変ってきます。警察官は、軍隊や司法高級官吏と共に、ブルジョア国家の暴力装置としての職務を与えられ、その職務執行に必要な特権を与えられています。ブルジョア国家の暴力装置は、プロレタリアート、被抑圧大衆をその搾取条件にしばりつけておくためのブルジョアジーの道具に他なりませんから、警察官はブルジョアジーに対して最も忠実な特権官吏としてブルジョア階級に属する一つの階層をなしています。下級官吏のなかには、地方公務員や教師のように、その職務の性格からいって、プロレタリアートに対して同情を示す階層もあります。これらの階層のプロレタリア的部分は、自からの経済的地位から生じる利益を捨て、プロレタリアートの利益に立つ限りでプロレタリアートの革命運動に参加することができるわけです。にもかかわらず日本共産党のように、国家公務員法をタテにとって、地方公務員を「国民全体の奉仕者」とし、教師を「聖職者」とすることは、官吏の職務の階級的性格をあいまいにし、プロレタリアートに対して階級協調を説くことにつながる反動的な主張であるといえます。日本共産党の論法に従えば、警察官も軍隊も、「社会全体に対する奉仕者」になりかねませんし、また警察官が「社会全体に対する奉仕者」として自己宣伝していることに対してその誤りを暴露することができないでしょう。今日共産主義的意識が日本共産党によってすっかり曇らされてしまっていることが、政治警察をして「社会全体に対する奉仕者」の顔をつくらせているのかも知れません。

ところで政治警察がしきりに強調する「人間性」や「社会性」とは次のようなものです。「両親をやしなう義務を放棄して活動することは人間の道にはずれている」「親兄弟と仲よくやってゆけば、社会もうまく

運営される」。こうした主張に、労使協調をつけ加えれば、これらの思想は、御用組合幹部や、転制が革命的労働者に語る言葉と同じものです。政府警察が私たちの身柄を勾留するという強权の行使を背景にしてこうした思想を語っているのにたいして、御用組合幹部や転制は、生産手段を所有している資本家に対する労働者の経済的服従、つまり資本の経済的支配を背景にして、こうした思想を語ってきました。だから私たちが勾留やこうした思想斗争に屈服してしまえば、プロレタリアートの経済的解放をめざした共産主義運動の担い手たり得ないことは明らかです。私たちは共産主義的意識に導かれて、政府警察の役割りを明らかにし、何故、何のために取調べが行はれるのかを認識し、勾留されることや思想斗争をいどまれる事から階級的な力を引き出し、自からの力を強化しなければなりません。社会党や日本共産党のごとき合法政党は、いわば政府警察と斗う以前から、これに対して屈服しているといえます。彼らが労働運動を組合主義的運動の枠に入れ、政治斗争を議会主義的路線の枠に入れていることはこのことを立証しています。彼らは御用組合幹部や、転制の思想攻撃に対して、労働者の労働組合的权利と市民的自由を対置しているにすぎません。プロレタリアートに、資本家への自からの経済的服従に対してめざめさせ、そこから階級的な力を引き出すような共産主義的な思想的働きかけは彼らによっては全くなされていません。政府警察にとって私たちが「社会から孤立」しているかの如く見えるのは、社会党や日本共産党がブルジョアジーに服従し合法主義の道を歩んでいることと大きくかかわっています。プロレタリアートの革命的な斗いが、資本家への自からの経済的服従に対する共産主義的なめざめをバネとし、経済的服従や政治的抑圧そのものから階級的な力を引きだすことによって共産主義革命へと向うものであり、私たちが、革命的マルクス、レーニン主義の復权をかかげ

今やっと共産主義革命への大道を進みはじめた時、「社会からの孤立」はむしろプロレタリアートの共産主義革命をめざした斗いとの連帯を意味するもの以外ではないと思います。

実際私たちが今回の政府警察の反撃に対し、獄中者も外の同志たちも、また私たちの党建設の斗いを支持する皆さん方も団結し、こぞって、この政府警察の攻撃から階級的な力を引き出し、党建設を前進させてゆくことができれば、私たちの党員は、必ずやプロレタリアートに資本家への自からの経済的服従に対してめざめさせ、経済的服従や政治的抑圧そのものから階級的な力を引きだす斗いを組織することに成功するでしょう。政府警察との斗争は階級斗争であり、共産主義的意識に導かれてこの斗争を斗かうことは、同時にプロレタリアートを革命党の周囲に組織し結集する斗かいであり、革命党を打ちきたえる斗かいであること、このことを確認して、第一報のしめくくりとしたいと思います。

一九七六年　一一月二〇日

京都拘置所にて

激励の手紙、カンパ等は　左記に

京都市伏見区竹田向代町一三八

京都拘置所内　大賀達雄

東京都港区新橋2－8－16 石田ビル4階14号
救援連絡センター 気付
「RG救対ニュース」編集委員会

カンパ 500円